

スポーツ研究の国際動向把握に向けた基礎的検討

——社会科学系の国際学術誌 6 誌を対象に——

中澤 篤史 早稲田大学スポーツ科学学術院准教授
黒須 朱莉 びわこ成蹊スポーツ大学講師
鈴木 楓太 早稲田大学スポーツ科学学術院助手
富田 幸祐 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程
熊澤 拓也 びわこ成蹊スポーツ大学助手
青野 桃子 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

1. 本稿の目的と背景

スポーツ研究の国際的な動向はどうなっているのか。本稿は、その把握に向けた基礎的作業の一つとして、スポーツを論じる社会科学系の国際学術誌に掲載されている論文等を蒐集・検討した、私たち研究会の活動を記録するものである。

私たちは、一橋大学スポーツ科学研究室の支援を得て、社会科学系スポーツ研究の国際動向を把握することを目的とする研究会を立ち上げた。研究会メンバーは、中澤（現早稲田大学）を代表者として、黒須（現びわこ成蹊スポーツ大学）、鈴木（現早稲田大学）、富田、熊澤、青野である。私たちは、上記の目的を達成するため、スポーツを論じる社会科学系の国際学術誌に掲載された論文等を蒐集した。理想的には、関連する国際学術誌をすべて網羅し、その中身を深く広く体系的にレビューできれば望ましく、そうしてはじめて「国際動向を把握できた」と言うことができる。しかし、そこまでは至っておらず、本稿で記録するのは、あくまでそうした国際動向把握に向けた基礎的な検討である。

具体的には、本稿の検討対象は、*International Review for the Sociology of Sport* (IRSS)、*Journal of Sport History* (JSH)、*Sociology of Sport Journal* (SSJ)、*The International Journal of the History of Sport* (IJHS)、*Sport, Education and Society* (SES)、*Sport in Society* (SiS) の 6 誌に限定されている。多くの国際学術誌の中から

この 6 誌を選んだ理由は、研究会メンバーが専門とするスポーツ社会学・スポーツ史・スポーツ教育学領域にひとまず焦点化したこと、それら領域においてこの 6 誌は創刊時期が古く論文等の蓄積が進んでいること、そして国際的に一定の認知と評価を得ていることが挙げられる。私たちは、これら 6 誌の創刊から 2015 年までに掲載された論文等を蒐集した。ここで言う「論文等」とは、いわゆる原著論文 (Original article/Paper) の他に、総説 (Review article) や特集論文 (Special issue/Forum)、研究ノート (Research note) を含むが、書評 (Book review) は含まない。蒐集場所は、一橋大学附属図書館、早稲田大学図書館、東京大学附属図書館、日本体育大学図書館などであった。

以下では、そうして蒐集した論文等について、論文数や発刊頻度などの全体傾向を概観した上で、各誌の個別動向を素描的に記述し、今後の展望を述べたい。(中澤篤史)

2. 対象学術誌と全体の概観

対象学術誌で蒐集された論文数と合計を表 1 に示した。IRSS は 1,276 本、JSH は 615 本、SSJ は 795 本、IJHS は 1,733 本、SES は 502 本、SiS は 962 本であり、合計で 5,833 本が蒐集された。各誌の年間論文数は、創刊時と 2015 年を比較すると、概ね増加傾向にある。とくに IJHS は約 8 倍、SES と SiS は約 5 倍に増加した。各誌を足し

表 1. 対象学術誌で蒐集された論文数と合計

年	IRSS	JSH	SSJ	IJHS	SES	SiS	計
1966	21						21
1967	15						15
1968	13						13
1969	11						11
1970	11						11
1971	10						10
1972	12						12
1973	27						27
1974	28	7					35
1975	22	7					29
1976	29	16					45
1977	28	17					45
1978	29	7					36
1979	25	7					32
1980	26	10					36
1981	34	9					43
1982	29	9					38
1983	30	10					40
1984	20	12	27	16			75
1985	22	9	26	15			72
1986	23	10	26	13			72
1987	27	13	32	16			88
1988	23	12	25	13			73
1989	23	11	29	16			79
1990	20	18	24	18			80
1991	21	18	27	13			79
1992	21	12	29	14			76
1993	23	13	27	12			75
1994	24	6	25	16			71
1995	21	11	29	24			85
1996	24	12	26	23	12		97
1997	22	12	20	22	12		88
1998	21	18	21	34	12	18	124
1999	25	22	19	37	12	20	135
2000	26	16	26	33	10	16	127
2001	23	15	24	37	12	21	132
2002	23	23	18	34	12	20	130
2003	23	12	19	39	14	19	126
2004	24	11	20	43	21	23	142
2005	29	16	24	56	17	30	172
2006	21	12	19	65	24	48	189
2007	17	24	30	85	22	56	234
2008	22	25	29	99	26	50	251
2009	22	22	28	125	24	90	311
2010	29	22	21	139	28	106	345
2011	27	24	25	151	37	99	363
2012	52	26	27	145	35	85	370
2013	49	22	24	134	47	95	371
2014	41	23	26	110	65	86	351
2015	88	14	23	136	60	80	401
計	1276	615	795	1733	502	962	5883

IRSS : *International Review for the Sociology of Sport*

JSH : *Journal of Sport History*

SSJ : *Sociology of Sport Journal*

IJHS : *The International Journal of the History of Sport*

SES : *Sport, Education and Society*

SiS : *Sport in Society*

(注) 各誌で蒐集した「論文等」の数を、年度別に記した。

合わせた年間の合計数も、増加してきた。当然ながら、対象学術誌の創刊が重ねられたことにも起因しているが、6誌がすべて創刊された1998年以降も増加し続けており、1998年の合計124本から、2015年には合計401本になった。今回の対象学術誌6誌の範囲では、国際的なスポーツ研究の数は増加傾向にあるといえる。(富田幸祐)

3. 各誌の個別動向

3-1. *International Review for the Sociology of Sport*

IRSSは国際スポーツ社会学会(International Sociology of Sport Association:ISSA)の学会誌であり、前継誌の*International Review of Sport Sociology*を含めると、今回対象とした6誌のなかでは最も古く、1966年から発行されている。ISSAは国際社会学会(International Sociology Association:ISA)の第27委員会(Committee 27)を組織しているだけでなく、南アメリカ、北アメリカ、ヨーロッパ、中国、韓国、台湾など各地の学会を関連団体としており、日本スポーツ社会学会もそのひとつである。

IRSSの目的は、研究や調査を広く国際的な学問界に広めることであり、特集や論考などのほかに、今回の蒐集には該当しないが多数の書評なども掲載していることが特徴的である。理論的、方法論的な視角も、人類学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー研究、メディア研究など、多岐にわたっており、学際的な試みも数多くなされている。

1966年に国際スポーツ社会学委員会(International Committee for the Sociology of Sport:ICSS)の学会誌として、*International Review of Sport Sociology*が発刊された。後述する50周年記念号の巻頭論文によれば、スポーツ社会学はこれまで「親」学問である、社会学とスポーツ科学・運動学のはざままで正統な学問分野としての評価をめぐって葛藤を続けてきたという。社会学からはスポーツを研究する価値があまり評価されず、スポーツ科学や運動学からは社会科学的・文化的探究について意義が見出されていなかった。研究分野の発展初期には

スポーツに焦点化した「sport sociology」としての傾向が強かったが、社会学的価値を強調すべく、1970年代後半からはだんだんと「sociology of sport」へと変化していった。1993年には、学会名をInternational Sociology of Sport Association (ISSA)、学会誌の名称を *International Review for the Sociology of Sport* へと改めた。IRSS はスポーツに焦点を当てたはじめての国際学術誌であり、発行当初は、年に1号であったが、1973年には季刊、2012年には隔月発行となり、現在は毎年8号発行されている。

2015年には学会発足・学会誌発刊50周年をむかえており、50巻(4-5号)では、ISSA and IRSS 50th Anniversary Articleと題し、50の分野について50人の研究者がこれまでの研究動向と今後の展望をまとめている。具体的には、アメリカ、カナダ、フランス、オーストリア、中国、台湾、韓国など各国の状況についてはもちろんのこと、幅広いテーマが設定されている。例えば、「ナショナル・アイデンティティとナショナリズム On national identity and nationalism」「グローバル化とスポーツの普及 On globalization and the diffusion of sport」「グローバル化とスポーツ政策 On globalisation and sport policy」といったグローバル化に関するテーマや、「男らしさとホモフォビアの変化 On changing masculinities and homophobia」「女性とフットボール On women and football」「ライフスタイル・スポーツとジェンダー On lifestyle sport and gender」などジェンダー関連のテーマ、また「開発と平和のためのスポーツ On sport for development and peace」「スポーツ・メガイベントと資本家の近代 On sports mega-events and capitalist modernity」といったテーマについてまとめられている。(青野桃子)

3-2. *Journal of Sport History*

JSH は、1972年に発足した北米スポーツ史学会(North American Society for Sport History: NASSH)がイリノイ大学出版から出版している学術誌である。1974年の創刊当初は年2号、1976年の第3巻からは春、夏、秋の3号が発刊されて

いる。原著論文(Article)の掲載数は各号でばらつきが見られるものの、近年は年間約10本で、これに特集(Forum)等を合わせると毎年20本程度の論考が掲載されている。

本誌が目指すのは、スポーツの歴史のあらゆる側面に関する研究の促進であり、NASSHはこうした研究、調査、執筆を促進し、刺激し、奨励することを目的としている。1960年代後半から70年代にかけては、スポーツの歴史研究に関連する学会の設立や学術誌の創刊が相次いだ。しかし、この時代に至るまで歴史学の領域においてスポーツは無視されつづけており、NASSHの設立に中心的な役割を果たしたのは北米の体育学者たちであった。なお、本誌は国際的な学術誌として認知されているが、編集委員(Editorial board)26人の所属研究機関を見ると、アメリカ・カナダが15名、イギリス他英語圏が9名となっており(2016年現在)、英語圏の学術誌としての性格が強い。

研究の動向を知る手がかりとなるものとしては、論文の他に充実した学術誌の動向紹介(Journal surveys)がある。北米を中心に、ヨーロッパ、オーストラリア、アジア、アフリカなどの地域毎に、学術誌・専門誌の動向が幅広く紹介されており、加えて時代や方法論に関する項目が立てられることもあった。この企画は2008年で終了したが、毎号30冊前後に上る書評(Book Reviews)がその役割を引き継いでいる。2002年からは、年に1回以上の特集を組んで、毎回数本の論考が掲載されている。その中には、学会大会での企画が基になっているものもある。2015年までの14年間で27のテーマが企画されており、近年の北米スポーツ史研究の動向の一端を垣間見ることができる。地域性に関しては、NASSHの母体である北米だけでなく、欧州スポーツ史に関連したものも多い。例えば、「欧州スポーツと近年の歴史学の挑戦 European sport and the challenges of its recent historiography」(38巻2-3号)では、各国史を超えた欧州スポーツ史が構想されている。

また、アテネオリンピック、ロンドンオリンピック、ブラジルワールドカップに合わせて、ギリシア、イギリス、ブラジルに関するテーマがそれぞれ組み込まれている。この他、グローバリゼーション、アボリジナルな（土着の）スポーツ、フェミニズム、スポーツ医学、人種とメディア、スポーツ映画など分析の対象や視点は多岐に渡る。

他のアジア地域と同様に、日本に関連するタイトルを冠した論文は少なく、5本中4本がアメリカとカナダの日系移民のスポーツ活動に焦点を当てたものである。日本の若手研究者が自身の研究を英語で発表することで、英語圏の日本スポーツ史研究にも刺激を与えることができるだろう。

(鈴木楓太)

3-3. *Sociology of Sport Journal*

SSJ は、1984 年の創刊以来、北米スポーツ社会学会 (North American Society for the Sociology of Sport: NASSS) が Human Kinetics 社から 3、6、9、12 月の年 4 回発行している社会学系の学術誌である。各号は主に論考、研究ノート、書評で構成されるが、時には論考・書評などに対する応答・反論が掲載されたり、NASSS の会長が特定のテーマに関して論考と同程度の分量を割いて論じたり、近年では特集が組み込まれることもある。各号に掲載される論考の数は概ね 4-5 本である。

SSJ では、プロスポーツやコーチング、スポーツ産業、健康、娯楽、文化、身体、人種、ジェンダー、メディア、オリンピック、学校スポーツ等の多様な研究テーマを様々な理論的／方法論的視角から分析することで、更なる研究の進展、批判的考察の深まり、理論的發展、大学など実践現場への還元が目指されている。

特集では、「英国カルチュラル・スタディーズ British cultural studies」(9 巻 2 号)、「身体文化研究：実りある対話を生むために Physical cultural studies: Engendering a productive dialogue」(28 巻 1 号)、「グローカリゼーション

とアジアのスポーツ Glocalization and sport in Asia」(29 巻 4 号)、「スポーツにおける動物の社会学 The sociology of animals in sport」(31 巻 4 号) など多彩なテーマが組み込まれている。更に、アメリカプロバスケットボールリーグ NBA (National Basketball Association) でマイケル・ジョーダン率いるシカゴ・ブルズが当時の史上最多年間勝利数で優勝した 1996 年には「マイケル・ジョーダンを脱構築する：ポスト産業社会のアメリカを再構築する Deconstructing Michael Jordan: Reconstructing postindustrial America」(13 巻 4 号) というテーマが組み込まれたり、「ホワイトネスとスポーツを位置づける Mapping whiteness and sport」(22 巻 3 号)、「肥満という社会的構築物—“私的な事柄は政治的な事柄” The social construction of fat — “The personal is the political”」(25 巻 1 号) などアメリカ社会に関係する特徴的なテーマが組み込まれることもある。また、「社会学と心理学の対話：スポーツの社会理論と身体文化の文脈を応用する Conversations between sociology and psychology: Applied social theory in sport and physical cultural contexts」(31 巻 2 号) といったテーマは北米社会学の心理学との距離の近さを窺わせる。

分析地域をみると北米が大半だが、北米以外を扱うものも多少はある。それらは 6 巻までは論考と別に「Outside North America」というカテゴリーで掲載されたが、7 巻からそのような区別はなくなり、分析地域に関係なく全て論考として扱われることとなった。日本に関する論考は 5 本あり、うち 4 本は海外の研究者によるものである。テーマはスポーツ組織、社会化、規律、メディア、マスキュリティ等、様々である。(熊澤拓也)

3-4. *The International Journal of the History of Sport*

IJHS は、政治、文化、社会、教育、経済、思想といった幅広い領域をカバーしたスポーツを論

じる国際学術誌である。前継誌は *British Journal of Sports History* (1984-1986) であり、1987年に現名称となった。現在は国際体育・スポーツ史学会 (International Society for the History of Physical Education and Sport: ISHPES) が発行元となっている。

刊行の頻度は、初刊から 2006 年までは年に 3 号から 8 号の発行数であったが、2007 年以降急増し、2010 年から 2015 年までは年間 18 号刊行されている。今回対象とした 6 誌のなかでは、年間発行号数が最も多い国際学術誌である。

執筆者や編集委員は、歴史学、人類学、社会学分野の研究者が多く、広く歴史的な文脈のなかでスポーツと社会の関係を探求する研究が多く掲載されている。IJHS の特徴は南北アメリカ、アフリカ、アジア、オーストラリアと太平洋地域、ヨーロッパといった各地域やその地域における問題に焦点を当てている点にある。2012 年からは中東も対象となっており、編集委員会の委員らもそれぞれの地域から集められている。

また、1995 年以降 IJHS では特集テーマが組まれるようになり、地域を対象としたテーマだけでなく、競技大会、スポーツに関する概念や理論、またその時勢に沿ったトピックも扱っている。たとえば、地域に関しては、「オーストラリア社会におけるスポーツの現在と過去 *Sport in Australasian society past and present*」(17 巻 2-3 号)、「南アジア社会におけるスポーツ *Sport in South Asian society*」(21 巻 3-4 号)、「北アメリカ *North America*」(25 巻 6 号)、「ヨーロッパ *Europe*」(25 巻 8 号)、「中東 *Middle East*」(31 巻 14 号) などが挙げられる。競技大会には、「幻のオリンピック: 1940 年東京大会、日本、アジア、オリンピック・ムーブメント *The missing Olympics: The 1940 Tokyo games, Japan, Asia and the Olympic movement*」(24 巻 8 号)、「ヨーロッパとロンドンオリンピック競技大会 1948 *Europe and the London Olympic games 1948*」(27 巻 6 号)、「1912 年スウェーデンのオリンピ

ック競技大会 *Swedish Olympics of 1912*」(31 巻 5 号) などがある。概念や理論については、「コロニアル、ポストコロニアル世界における筋肉的キリスト教 *Muscular christianity in colonial and post-colonial worlds*」(23 巻 5 号)、「スキーとアイデンティティ: ネーション、階級、ジェンダー、産業化 *Skiing and identity: Between nation, class, gender, and industrialisation*」(30 巻 6 号)、そして時勢に沿ったものは、「スポーツにおけるドーピングのグローバルヒストリー *A global history of doping in sport*」(31 巻 8 号) や、2015 年 FIFA 女子ワールドカップ開催年の「女性とフットボールコードー国際的なパースペクティブ *Women and the football codes - International perspectives*」(32 巻 18 号) などが挙げられる。(黒須朱莉)

3-5. *Sport, Education and Society*

SES は、そのタイトルが示す通り、スポーツ・教育・社会をテーマにした社会科学系の国際学術誌である。

イギリスのスポーツ教育学者とスポーツ社会学者を中心に、1996 年に刊行が開始された。当初は年 2 号の刊行であったが、その後刊行頻度は高まり、2015 年時点では年 8 号の体制で刊行されている。

学術領域は多様であり、スポーツ教育学とスポーツ社会学を中心として、他にも心理学・歴史学・政治学・メディア研究・開発学・思想哲学などの立場から行われた論文等も掲載されている。

分析対象は、学校の体育・スポーツがもっとも多く、そこでの教育実践や指導、組織・クラブ運営の諸問題、プログラムやカリキュラムの編成、教師教育や指導者育成などが扱われている。他にも、スポーツ参加、生涯スポーツ、子どもの遊び、余暇活動、健康意識や日常的な運動実践、フィットネスクラブや美容健康体操、レジャー産業、スポーツ・健康の政策動向や行政主導の健康教室、医療・福祉領域のリハビリテーションや各種療法、

ドーピングやフェアプレイといったスポーツ倫理の諸問題など、スポーツ・教育・社会というテーマに関連する種々様々な対象が扱われている。

特定のテーマに沿った特集論文がまとめて掲載されることもある。たとえば、「保健体育における健康・身体・アイデンティティ Health, the body, and identity work in health and physical education」(9巻2号)、「教育で(健康と)身体力をつける(奪う) (Dis)abling the (health and) physical in education」(11巻3号)、「少年・身体・スポーツそして学校教育 Boys, the body, sport and schooling」(13巻2号)、「ボディペダゴジー・教育・健康 Body pedagogies, education and health」(15巻2号)、「新しい方向、新しい問い? 社会理論・教育・身体化 New directions, new questions? Social theory, education and embodiment」(16巻3号)、「体育とスポーツ指導に関連した実践と政治 The practice and politics of touch in physical education and sports coaching」(18巻5号)、「自己エスノグラフィとナラティブ研究 Autoethnography and narrative studies」(19巻1号)、「健康・体育・スポーツの社会学の具体化? Embodying the sociology of health, physical education and sport?」(19巻5号)、「エレクトロニック・保健体育 eHPE (Health and physical education)」(19巻6号、20巻1号)などがある。

掲載論文で具体的に分析される地域を見ると、イギリスを中心としたヨーロッパが多く、オーストラリアやニュージーランドもある。一方で、アジア地域を対象とした研究は少なく、日本を対象とした論文は3本であった。(中澤篤史)

3-6. *Sport in Society*

SiS は、社会におけるスポーツのあり方を多角的な視点から多面的に明らかにすることを狙いとして1998年に創刊された。当初は *Culture, Sport, Society* というタイトルが用いられていたが、より多くの学問領域をまたぐ学際的な雑誌を目指し

て2004年より現行タイトルに変更を行った。年間発行号数については、創刊年は2号を発行し、翌年の2巻からタイトル変更後の2005年8巻までは3号であった。その後も、毎年1、2号ずつ増えていき2009年12巻より10号を発行するようになっている。

創刊年が1998年ということもあり、1巻2号ではフランスワールドカップに関する特集が生まれ、その後もラグビーのワールドカップやオリンピック開催年には同大会に関する特集号を刊行し、時事的なトピックにも関心が高いことをうかがわせる。2016年も19巻6号において「オリンピック管理からオリンピック統治へ From Olympic administration to Olympic governance」と題した特集を組んでいる。また時事的なものだけでなく、政治、ジェンダー、人種、薬物、ビジネス、都市、市民権、外交、科学、音楽、コミュニティなどをテーマとした特集や、スカンジナビアやオーストラリア、サハラアフリカ、アジアといった地域を限定した特集も組まれている。

こうした特集のほかに、1冊全てが一人の著者によって著された特集も存在する。著者名とテーマを上げると Brain Stoddart 「スポーツと文化の響くところ Soundings in sport and culture」(9巻5号)、Alan Klein 「越境するスポーツ研究に向けて Towards a transnational sports studies」(10巻6号)、John Hughson 「スポーツ文化をつくる The making of sporting cultures」(12巻1号)、Joseph A. Maguire 「過程社会学とスポーツの考察 Reflections on process sociology and sport」(14巻7-8号)、Bruce Kidd 「スポーツのための批判的支援 Critical support for sport」(16号4巻)である。

また個別論文ではクリケット、オリンピック、フットボールが特に多いテーマとして挙げることができ、それらのテーマが社会学、歴史学、人類学、メディア研究などの方法論によって論じられている。

誌名である *Sport in Society* の通り、社会にお

けるスポーツに関する諸現象を多様な学問領域から解き明かそうとする論文が並んでいることが、本誌の全体的な特徴といえるだろう。(富田幸祐)

4. 今後の展望

本稿では、スポーツ研究の国際動向の把握に向けた基礎的作業として、社会科学系の国際学術誌に掲載されている論文等を蒐集・検討した、私たち研究会の活動を記録した。今後の展望として、より本格的な国際動向把握を進めるための課題を大きく2つ指摘しておきたい。

一つは、蒐集・検討の範囲に関する課題として、対象学術誌を増やすことである。本稿では、上述した通り、研究会メンバーの専門領域の関係などから、蒐集・検討対象を、スポーツ社会学・スポーツ史・スポーツ教育学領域の6誌に限定せざるを得なかった。しかし、当然ながら、社会科学的なスポーツ研究が収められた国際学術誌は、それら以外にも多くある。たとえば、哲学領域の *Journal of the Philosophy of Sport*、政策学・政治学領域の *International Journal of Sport Policy and Politics*、マネジメント領域の *Journal of Sport Management*、*European Sport Management Quarterly*、経済学領域の *Journal of Sports Economics*、学際領域の *Journal of Sport and Social Issues*、*International Journal of Sport and Health Science*、*Asia Pacific Journal of Sport and Social Science*、などである。今後は、こうした雑誌にも蒐集・検討の範囲を広げる必要がある。

もう一つは、蒐集・検討の観点についての課題として、特定のテーマに絞って、より深くレビューすることである。本稿では、全体的な論文数や発刊頻度の傾向、そして各誌の特徴や動向を素描したに過ぎない。今後は、特定のテーマで雑誌横断的な蒐集・検討を進めて、それぞれのテーマごとのレビュー論文を執筆したり、研究史を整理したりすることが必要になる。研究会メンバーの専門領域に絡めると、たとえば「ユース」「オリンピ

ック」「ジェンダー」「アジア」「グローバリゼーション」「レジャー」といったテーマが考えられる。そうした個別的なテーマの検討を重ねつつ、それらを複合させたり体系立てたりすることで、全体的なスポーツ研究の国際動向把握に近づけるだろう。

しかし、当然ながら、こうした課題への取り組みは、私たち研究会メンバーだけで十分にできるわけではないし、すべきというわけでもない。本稿を小さなきっかけとして、関心と力量のある日本の多くの研究者に広く開かれた形で、取り組まれることを望みたい。(中澤篤史)